

鼠径リンパ節への転移を認めたカニクイザルの子宮内膜症

○中村紳一朗^{1,2}、小野文子¹、寺尾恵治³、鳥居隆三²

(¹予防衛生協会、²滋賀医科大学動物生命科学センター、³医薬基盤研霊長類医科学研究センター)

子宮内膜症は内膜組織が、主に骨盤腔および腹腔内に播種、腔内組織に定着し、性周期と共に出血や炎症を繰り返す生殖器疾患である。重篤な場合は、肺をはじめとする他臓器への転移が知られている。子宮内膜症はカニクイザルをはじめとするサル類の多くの種でも報告されているが、骨盤腔および腹腔以外への転移は報告されていない。

病理解剖の際、肉眼的に腹腔への播種を示す子宮内膜症が確認された 8 例のカニクイザル（平均 19 歳）の子宮体部、腹腔内播種組織、鼠径リンパ節のホルマリン固定、パラフィン包埋標本を用い、病理組織学的、免疫組織化学的検索を行った。後者の一次抗体としては抗ケラチン、エストロゲン受容体（ER）、プロゲステロン受容体（PR）モノクローナル抗体を用いた。

8 例すべてに内膜組織の子宮筋層から外膜への浸襲像が見られた。腹腔内播種組織は、多数の小型腺腔からなる大小の結節を構成するものが 5 例、大型嚢胞を形成するものが 3 例であった。鼠径リンパ節の腺構造は 8 例中 4 例に見られ、腹腔内で大小結節を形成したうちの 3 例、大型嚢胞を形成したうちの 1 例であった。4 例ともに、腺上皮と間質細胞から構成される子宮内膜に類した構造を持っていたが、腺上皮の増殖が優位だった。また間質細胞を持たない数個の腺上皮の細胞塊も認められた。リンパ節の腺構造の腺上皮はすべての例でケラチン陽性、間質細胞は陰性だった。ER は腺上皮が 4 例中 3 例、間質細胞が 4 例中 1 例、PR は腺上皮が 4 例中 4 例、間質細胞が 4 例中 3 例陽性だった。リンパ節の腺構造は 4 例ともに ER、PR のいずれかが陽性だった。

これら腺上皮と間質細胞からなる腺構造が ER ないしは PR を持つことから、この組織は子宮内膜に由来することが明らかとなった。内膜組織の転移ルートとして、数個の腺上皮細胞塊が鼠径管またはリンパ管を経由し、鼠径リンパ節に定着することが予想された。この病態はヒトで知られる鼠径部子宮内膜症に一致していた。